

日本サッカーと熊野の八咫鳥

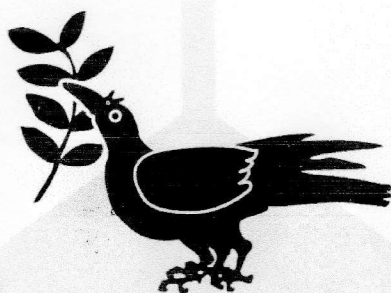


熊野の神鳥 八咫鳥

熊野三山（熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社・那智山青岸渡寺）では、八咫鳥を神様の使いの鳥としています。神武天皇が霊地：熊野に迂回し、八咫鳥の先導で太陽を背にして大和に攻め上り、日本の国を開いた故事（日本書記）にちなんだものです。八咫鳥は太陽のシンボルでもあり「南山」と呼ばれた熊野にふさわしい魂を運ぶ霊鳥とされています。



熊野本宮大社の鳥のマーク



熊野速玉大社の鳥のマーク



熊野那智大社の鳥のマーク

日本サッカーの始祖・熊野の中村覚之助



明治11年、和歌山県東牟婁郡那智村^{はま}宮^{みや}（現：那智勝浦町）に生まれた中村覚之助は、同32年、和歌山師範学校を卒業後、東京高等師範学校（現：筑波大学）に入学しました。同36年、中村覚之助は、坪井玄道教授が海外から持ち帰った、国の「アソシエーション・フットボール」を日本初のサッカー指導書として翻訳・出版し、同校にア式蹴球部を創設。同37年2月6日には、日本人初の東京高師チームと横濱外人倶楽部の対外試合を主導するなど、「日本近代サッカーの始祖」とよばれるにふさわしい業績を残しています。同年3月、東京高師を卒業後、中国の済南師範学校で教鞭をとりましたが、同39年7月、29歳の若さで逝去しました。

熊野の宗教文化のシンボルともいえる日本サッカー協会のマーク。熊野出身の中村覚之助が、そのマークの発想に影響を与えた可能性が指摘されています。